

独自の配合飼料で育てた、地域に愛される卵を提供 ～おいしくて、安心できるスタンダードなものを食卓に～

大府市 花井千治（はないち はる）さん
養鶏

【平成23年5月30日掲載】

大府市で養鶏を営み、直接販売を中心として、卵の生産だけでなく加工品の企画・開発を行っている花井千治さん（写真1）を紹介します。花井さんは養鶏に携わり28年目を迎え、現在の経営規模は採卵鶏4万羽、うち名古屋コーチンを4千羽飼育し、1日当たり3万2千個の卵を生産しています（写真2）。

1 独自の飼料配合により個性のある卵を生産

花井さんが生産する卵はすべて、独自の飼料を配合して鶏に給与しています。

そのうちの1つが食品残さ飼料であるエコフィードです。花井さんは、食品メーカーからのタンパク質を主にした食品残さに、米や大豆を混ぜて独自に発酵飼料を作り、それらを飼料全体の8～9%に配合して給与しています。

それぞれに個性をもつ卵は、黄身がトロツとしてコクがあると定評のスタンダードでリーズナブルな「元気くん」をはじめ、飼料米が給与された名古屋コーチンの卵「ごんのたまご」、卵かけご飯用のグルメ卵「和（なごみ）」、ラベンダーなどハーブを飼料に配合した「ハーブラン」などの名称で販売しています（写真3）。

2 地域農業と連携した「ごんのたまご」

特に、新商品である名古屋コーチンの「ごんのたまご」は、花井さんが、以前から「知多地域で名古屋コーチンを産地化したい。」という強い思いがあったことから、知多養鶏農業協同組合32戸のメンバーに呼びかけ、それに賛同した5戸で、平成22年11月に「ごんの会」を設立し、うち名古屋コーチンを飼育している花井さん始め4戸で生産が始まりました（写真4）。

「ネーミングにはストーリー性が大事である」と語る花井さん。半田市出身の新美南吉・作の童話「ごんぎつね」にちなんで、「ごんのたまご」としました。

えさとなる飼料米は、鶏ふんたい肥を活用した地元の水田で生産されたもので、「ごんの会」



写真1 花井千治さん



写真2 作業の様子



写真3 様々な種類の卵

のメンバーが、それを一部飼料として給与しています。「知多地域で資源循環型農業に取り組んでいる農家の新鮮な卵」というのがキャッチフレーズです。

花井さんは当初、同じ品質のものを別名で売っていましたが、商品に込める思いが消費者にうまく伝わらず、思うほど売上は伸びなかったそうです。そこでメッセージを伝えるため、商品名を「ごんのたまご」に変更し、デザインも一新すると、売上げが伸び始めたそうです。商品名には「ネーミング」や「ストーリー性」がとても大切であることをあらためて実感したそうです。



写真4 ごんのたまご

3 主役の「卵」を引き立てる卵関連の加工品

花井さんは、卵だけでなく、加工品の企画・開発にも力を入れています。

5年前に花井さんが発案し、「知多養鶏農業協同組合40周年の記念品」として配布したレトルトの知多産赤どり「チキンカレー」は評判が良く、商品化されました。これがきっかけとなり、卵かけご飯用に「しょうゆ」ではなく地元の声を取り入れ、「たまり」にこだわった「たまご屋さんの知多産たまり」、また名古屋コーチンを使った「名古屋コーチン白湯鍋（ぱいたん）スープ」など幅を広げていきました。

(写真5)。



写真5 様々な加工品

4 地域の農産物を地域の消費者に届ける

出荷先は、相場に左右されない直売所及び地元のスーパーでの販売が7～8割を占めています。大府市にある「げんきの郷」を始め、知多地域5か所の直売所です。(写真6)。「げんきの郷」にある花井養鶏場の直売コーナーでは、消費者のニーズに応え、スタンダードなものから高級なものまで豊富な商品を取り揃えています。また、卵関連の加工品も充実しています。

また花井さんは、地域の農業や地元の関連産業との結びつきを大切にしています。現在、「げんきの郷」生産者出荷組織委員長、知多農産物直売研究会連絡会の会長職に就き、知多地域の地産地消に尽力されています。

直売所での販売について、「いかに売るかを考えた場合、直売所では卵だけではなく加工品などいろいろなアイテムを持っていないといけない。」「今は値段が高いと売れないので、卵の数を少なくして売るなどアイデアをもっともっと絞る必要がある。」と語る花井さん。



写真6 直売所の様子

また委員長を務めるげんきの郷の生産者出荷組織については、「出荷組織は、発足して10年が立ち、生産者は高齢化してきている。まだ販売に関しては、生産者のマナーがいまひとつであり、消費者を迎え入れるという意識が低い。お客さんに気持ちよく買っていただけるように働きかけていきたい。」と語られました。

5 将来の夢

将来の夢をお聞きしたところ、「経営自体は大きく変えるつもりはない。スタンダードな商品である“元気くん”を作って23年目になる。各家庭の冷蔵庫を開けると、必ず花井ブランドの卵が入っているというのが理想。子どもの頃からいつも食べていて、やがて大人になり、今度は自分の子供たちに食べさせたいと思う“決して裏切らない商品”をいつまでも提供し続けたい。」と笑顔で語られました。

執 筆：農業経営課

取材協力：知多農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2011, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.